

R
E
P
O
R
T
S

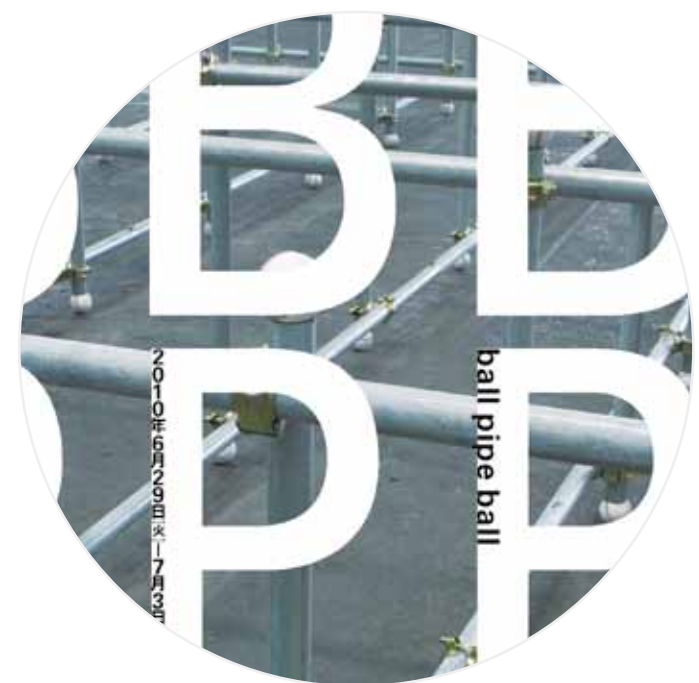
A
C
T
I
V
I
T
Y

活動報告書

Tamagawa
Art
Gallery
Projects

2009-2010 2010-2011

玉川大学芸術学部
College of Arts, Tamagawa University



TAG=Tamagawa Art Gallery Projectsは、玉川大学芸術学部ビジュアル・アーツ学科の教員と学生が中心になって企画・運営する、主として美術分野に関するさまざまな芸術関連プロジェクトの総称です。

2009年に試験的に開始され、校内のスタジオや教室を一時的に「ギャラリー」として使用しながらこれまで各種の展覧会、講演会、シンポジウム、あるいはパフォーマンスなどを開催してきました。本報告書はそれらの概要をまとめたものです。

これらのプロジェクトの目的は、本学芸術学部の学習・研究成果を広く社会に問うと同時に、社会や最先端のアートシーンのヴィヴィッドな空気を学内に伝えること。つまり、大学と社会を美術に関するさまざまな「プロジェクト」を通して接続してゆくことです。2010年4月から2011年の3月までのシーズンでは、本学芸術学部共同研究の協力を得て、学生・教員作品による展覧会のほか、学内外の専門家による美術史学関連のレクチャー、招聘アーティストによる作品展示など、多彩なプロジェクトを開催してきました。

ここには大学の現状を積極的に発信するとともに、既成の美術館やギャラリーにはない、大学と学生ならではの柔軟性をもって打ち出されるユニークなプロジェクトの数々があります。2011年度もこのプロジェクトは継続され、これまでもましてさまざまな試みを発信していく予定です。この報告書を通じてこれまでの活動をご覧いただくとともに、今後の活動内容にもご注目いただければ幸いです。

末筆ながら、すべてのプロジェクトには各領域でご活躍の学外の方々、そして学内の学生や教員のお力添えを得ました。この場を借りて篤くお礼を申し上げます。

TAG Projects 2009-2011運営代表
林 卓行（芸術学部ビジュアルアーツ学科准教授）

2009-2010

- 3 東方悠平展
『宇宙船いちごう』
- 7 連続公開講演会
『ビデオがやってくる』
- 9 公開レクチャー
『ヴェネツィア急襲!!』
- 10 公開講演会
『Fashion x Luxury』
- 11 TAKESHI MIYAKAWA Fashion Show
『The Increment』

2010-2011

- 15 東方悠平展
『象はキャタピラーに乗って+デコ銃ファクトリー デコ銃100丁できるかな』
- 19 公開講演会
『マネとモダン・パリ』
- 21 富井大裕展
『Ball Pipe Ball』
- 25 合同講評会
『Open Criticism』(1)
- 27 横山裕一 公開トーク・イベント
『蛍光塗料は劣化する__知らないことをしてみたい__フェルメールに勝つにはわれわれはどうしたらよいのか』
- 31 『Sound | Vision』展
- 35 アーティスト・イン・児童館 臼井隆志氏
公開講演会
『クリエイティブ・アート・マネジメント
思いもよらない出会いをつくる』
- 37 合同講評会『Open Criticism』(2)

宇宙船いちごうはゴミを燃料にイチゴのへたを回 転させて沈み行く地球より脱出する

宇宙船いちごう





＝展示（部分）

東方悠平『宇宙船いちご』展

ホールに響き渡るセミの鳴き声。そして中央に浮かぶ巨大なイチゴ。2009年2月に愛知で行われた『アーツ・チャレンジ2009』出品作を再構成した作品。“宇宙船いちご”がゴミを燃料に回転するイチゴのへたから推進力を得て、沈み行く地球より脱出する場面が表現されている。

異常気象でサイクルの狂った地球では、セミの声だけが寂しく鳴り響いている。

会期 → 2009年5月13日～5月21日 10:00～19:00（土日休） 会場 → 玉川大学3号館102 / エントランスホール
アーティストトーク → 5月15日 17:15～18:30 展覧会レセプション → 5月15日 18:30～20:00 協力 → 小原國芳教育芸術奨励基金

東方悠平 美術作家。1982年生まれ、札幌出身。2008年筑波大学大学院修士課程、芸術研究科総合造形コース修了。東京を中心に活動。「笑い」をモチーフに、人間と世界との関係を描く、作品やワークショップ等のプロジェクトを展開している。個展、グループ展多数。2008年に沖縄アートフェスティバル（日比野克彦賞）、2009年に神戸ビエンナーレ2010年に岡本太郎美術芸術賞(TARO賞)展参加。

VOICES

参加者の声

東方さんはこの大学に来て、ゴミが落ちていないことに驚いたという。日々生まれるゴミ、私たちはそのゴミがいったいどこに行ってしまったのかを追求することはない。この作品は、見えなくなるとすぐ忘れられてしまうが、決して消えているわけではないブラックボックスが、私たちのすぐ側に「存在」しているという問題提起である。

ミーンミンミンと狂ったように鳴り止まない蝉の声が遠くから聞こえる。季節はまだ五月であるが、日に日に強まる日差しに蝉の声を聞くともう夏が来たのかと錯覚する。音のする方を覗いて見ると、どこから出たんだろうという大量のごみの上で、大きないちごのへたが回転している（いちごの種の部分が蝉だった！）。



＝アーティストトーク



＝レセプション

ビデオがやってくる!!



奥村雄樹 “Can't Get You Out of My Head ” 2007 DVD 04'53”



増本泰斗 “The World” 2008-2009 Single Channel video, color, sound, 59min, “Cooking a recipe written in a language the cook does not understand

連続公開講演会『ビデオがやってくる』

東京国立近代美術館にて2009年3月31日-6月7日に開催された展覧会『ビデオを待ちながら』の見学会をきっかけに、ビデオ・アートについての関心を広げ、知識を深めてもらうための特別レクチャーとトーク・イベントを連続で開催。ともに映像作家として活躍する奥村雄樹氏と増本泰斗氏をゲストにお招きし、映像作品の可能性、そして面白さとは何かをディスカッションした。

2009年6月11日 17:00-19:00

展覧会『ビデオを待ちながら』をめぐる特別講義 林 卓行 (ビジュアル・アーツ学科准教授)

1. ブルース・ナウマン、リチャード・セラ、フランシス・アリスらによる関連作品の紹介。
2. 参加者によるディスカッション

2009年6月25日 17:00-19:00

『2000年以降の映像作品を巡るアーティストトーク』

1. 映像作家、奥村雄樹・増本泰斗による自作プレゼンテーション
2. 両氏による公開対談／学生とのディスカッション

会場 → 玉川大学3号館102

奥村雄樹 1978年青森県生まれ。東京にて制作・活動。1997-2002 年多摩美術大学油画専攻。2000 年クイーンズランド美術大学（ブリスベン）に交換留学生として一年間在学。2002-2004年 東京藝術大学大学院修士課程油画専攻。2009年より東京藝術大学大学院博士後期課程在籍。

2010年の個展に『奥村雄樹とこどもたち：くうそうかいぼうがく（青森編）』、国際芸術センター青森 ギャラリーB、青森。『くうそうかいぼうがく・落語編』、MISAKO & ROSEN、東京。Fantastinen matka / Fantastic voyage, Gallery Augusta、スオメンリンナ、ヘルシンキ。

増本泰斗 1981年広島県生まれ。東京都在住。2004年東京工芸大学大学院修士課程メディアアート専攻写真領域修了。2004年より都内を中心に個展・グループ展などで作品を精力的に発表。2007年にはボルトガル、リスボンにあるMau Maus主催のレジデンシー・プログラムに一年間滞在。制作及び発表を行う。

VOICES

参加者の声

くしゃみをする、別の場所に現れる、またくしゃみをする、また別の場所に一見していると、映像作品のベースにだんだんのせられてしまう。作家奥村氏の作品紹介から始まった今回のイベントは、何を撮影するか、だけでなくどうビデオを使うかという「ビデオのこれからの可能性」について考えさせるものだった。

「記録方法のひとつ」として生まれたヴィデオは、アートと交差したことで新しい段階を迎えた。東京国立近代美術館での展示見学、レクチャー、ディスカッションという一連の流れで映像に迫った今回のイベント。終了後には早速映像作品に取り組む生徒がいた。カメラさえあればすぐ取り組めるのも、ヴィデオの利点であると感じた。学生がつくる新しい作品が楽しみだ。

公開レクチャー 『ヴェネツィア急襲!!』 美術批評家と美術家が行く、“VB”

第53回ヴェネツィア・ビエンナーレの視察を行った林卓行と東方悠平による報告をもとに、これからの国際展の展望や可能性についてのレクチャー及びディスカッションを行った。現在のアートワールドで高い評価を受ける作家や作品を紹介、参加者に現代美術への興味を持たせ、知識を深めてもらう機会としたプロジェクト。

会期 → 10月27日 17:00-19:00 会場 → 玉川大学3号館102

VOICES

参加者の声

同じ展覧会を見ても、批評家と美術家で視点が違うのに驚いた。

水路やゴンドラが走るヴェネツィアという街自体が特別な環境。そんな環境で美術作品を見ると、非日常感、お祭りがより強く感じられる。（東方）

やっぱりVB（＝Venezia Biennale）は国際展の中でも、特別だと思う。「国別」が古いという批判もあるけれど、あたりさわりのない凝ったテーマをひねり出してみても、自分たちに設定したそのテーマに妙に振り回されている最近の国際展より、とにかく国別でやってしまうというVBの乱暴な切り口のほうが、ずっとスリリング。（林）



ヴェネツィア急襲!!

公開講演会『Luxury の裏切り』

ジャーナリストとして、ファッション業界の最先端でご活躍中の南谷えり子氏を講師にお迎えした、特別プログラム。いま人々は《ファッション》になにを欲望し、そして《ファッション》はその欲望を受けて、どこへ向かおうとしているのか——東京都現代美術館にて行われた『ラグジュアリー：ファッションの欲望』展を手がかりに、《ファッション》の現在と未来を、鋭く、そして大胆に解き明す試み。

日時→ 12月9日 17:00-19:00 会場 → 玉川大学3号館102
展覧会見学会 → 講師:林卓行 『ラグジュアリーの欲望』展 東京都現代美術館 2009年12月6日

VOICES

参加者の声

ジャーナリストとして現場を見てきた南谷氏は、人々のファッションに対する欲望は、現在流行中の「ファスト・ファッション」ではけっして満たされないと説く。何故なら人々はファッションに「独自性」を求めるからである。

「学生主体のショーをやる場合、何が最も重要か？」という質問に対し、南谷氏は「学生は『情熱』をもってやる、これにつける。技術ではない。」と即答した。ファッションはいつの時代も「情熱」から生まれている。

南谷えり子 学習院大学経済学部およびFIT（Fashion Institute of Technology）、FBM（Fashion Buying and Merchandising）科卒業。伊藤忠ファッションシステムNY駐在員、『ELLE JAPON』編集長を経て、現在ファッションライターとして活躍中。玉川大学芸術学部非常勤講師。



FASHION X LUXURY

THE INCREMENT



宮川健フ
アッ
シヨ
ン・シ
ョウ

Tamagawa
Art
Gallery
Projects

2009-
2010
#5

INCREMENT＝

増加、増幅、増殖。

それらの要素を内包した衣服たち





THE INCREMENT 宮川 健

本学農学部4年生、宮川健によるファッションショー、および展示を行った。独学でパターンを学んだ彼のデザインは、生物学の要素も取り入れられており、彼独自のイメージを生み出している。

会期 → show 2010年1月6日 18:00—

exhibition 1月7日—8日 13:00—18:00

会場 → 玉川大学3号館102

宮川健 2010年玉川大学農学部生物環境システム学科卒業。現在英国留学中。

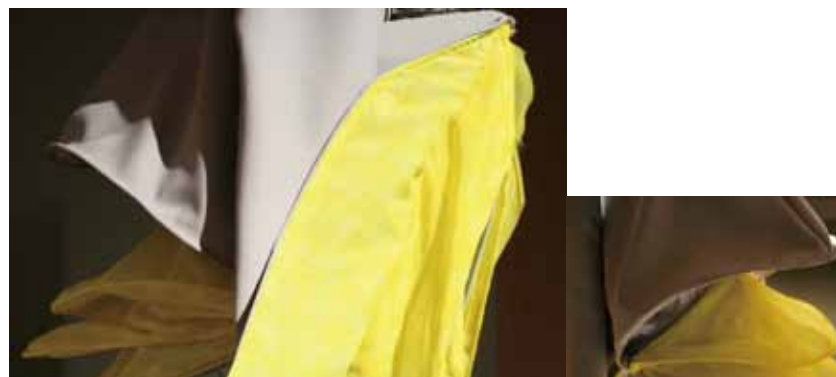
VOICES

参加者の声

洋服、ショーの音楽、宣伝、展示方法まで全て宮川さんがプロデュースをしていた。トータルで衣服からパッケージングした宮川さんが、いわゆる日本的なきれいなプロダクトを作ってみたい、挑戦してみたいと話していたことが意外だった。

ショーでは、KraftwerkのThe Robotsをアレンジした曲が流れ、モデルが颯爽と歩き出した。

通常のショー形式とは異なる、コンテンポラリー・ダンスのようなモデルの動きと、徐々に形が変わる洋服の「見せ方」が印象に残った。





象はキャタピラーに乗って
デコ銃100丁できるかな

デコレーション×銃→デコ銃！

デコ銃ファクトリーでは

銃にさまざまな装飾等を行う

作業風景を見学することができます。



キャタピラーに乗った象＝

あらゆるものをなぎ倒し進行する象の戦車。

冷たい鉄のボディ、

悲しげな鳴き声と砲撃音が室内に響く。



東方悠平展・
ワークショップ

Tamagawa
Art
Gallery
Projects
2009-
2010
#5



『デコ銃ファクトリー』会場風景



ギャラリートーク

東方悠平展『象はキャタピラーに乗って+デコ銃100丁できるかな』

2009年の神戸ビエンナーレにて展示された作品を再構成。象の戦車からは、可笑しくもせつない鳴き声が響く。

また同時開催として、『デコ銃ファクトリー』がオープン。おもちゃなどのデコレーション素材に囲まれた工員たちが、日々「デコ銃」を生み出している様子を見ることができる。関連トークでは川崎市岡本太郎美術館学芸員である仲野泰生氏をお迎えし、同館が運営する岡本太郎現代芸術賞(TARO賞)に出展された作品を見ながら、氏の現代の美術に対する見解についてお話を伺った。

会期 → 2010年6月7日-16日 10:00-19:00 会場 → 玉川大学3号館102 / エントランスホール
 ギャラリー・トーク→『美術とその周辺』東方悠平×仲野泰生 6月11日17:00-19:00 展示会場にて

VOICES

参加者の声

「デコ銃工場」を見に行くたびにになにか新しい銃が創造されているのが楽しみだった。

立体とワークショップをいちどに両方できるなんて、多才。ぜんぜん違うジャンルなのに、コンセプトが一貫しているように感じられるのもおもしろい。

「デコ銃」は子供も楽しめるうえにメッセージ性もある、いいワークショップだと思う。あとで横浜やArts Chiyodaなどあちこちのイベントでひっぱりだこになったのもわかる。

「モダン」の、そして「パリ」の申し子、 エドゥアール・マネの魅惑

マネとモダン・パリ



公開講演会『マネとモダン・パリ』

三菱一号館美術館学芸員 杉山菜穂子氏を招いての公開講演会

19世紀半ば、フランス・パリ。生粋のパリジャンにして「近代」の申し子、エドゥアール・マネが、その絵画によって切り取って
みせた「近代」とは何だったのか。そしてそこで切り拓かれた絵画の新時代とは――

2010年、東京・丸の内に開館した三菱一号館美術館のオープニングを飾った話題の展覧会、『マネとモダン・パリ』の見所を、
展覧会企画に携わった同館学芸員の杉山菜穂子氏に聞いた。学内外から美術をはじめ、近現代史や都市論、フランス文化に関心を
持つ多数の聴衆の参加があった。

日時→ 2010年6月18日 17:00-18:30 会場 → 玉川大学3号館102

VOICES

参加者の声

「黒の魔術師」と呼ばれたマネ。彼の作品の最も大きな特徴は「黒」であるけれど、黒であり、でもただの黒ではないマネの作品
の魅力が、迫ってきた。

今回は学生だけではなく、広く一般からも来場が見られた。

来場した60代の女性の方からは「最近では学生さんがあまり美術館に行かないと聞き、とても勿体ないと思っている」とコメントを
いただいた。良い作品は、決して廃れない。より多くの機会に美術館に足を運ぼうと思う。

ピカソがマネの作品のパロディを作っているという話がとても印象に残っている。マネが当時美術界に与えた影響、そして他の作
家との違いを比較することができた。



BALL PIPE BALL=

新鋭アーティストによる幻の作品を、
オリジナル・バージョンで

B B B

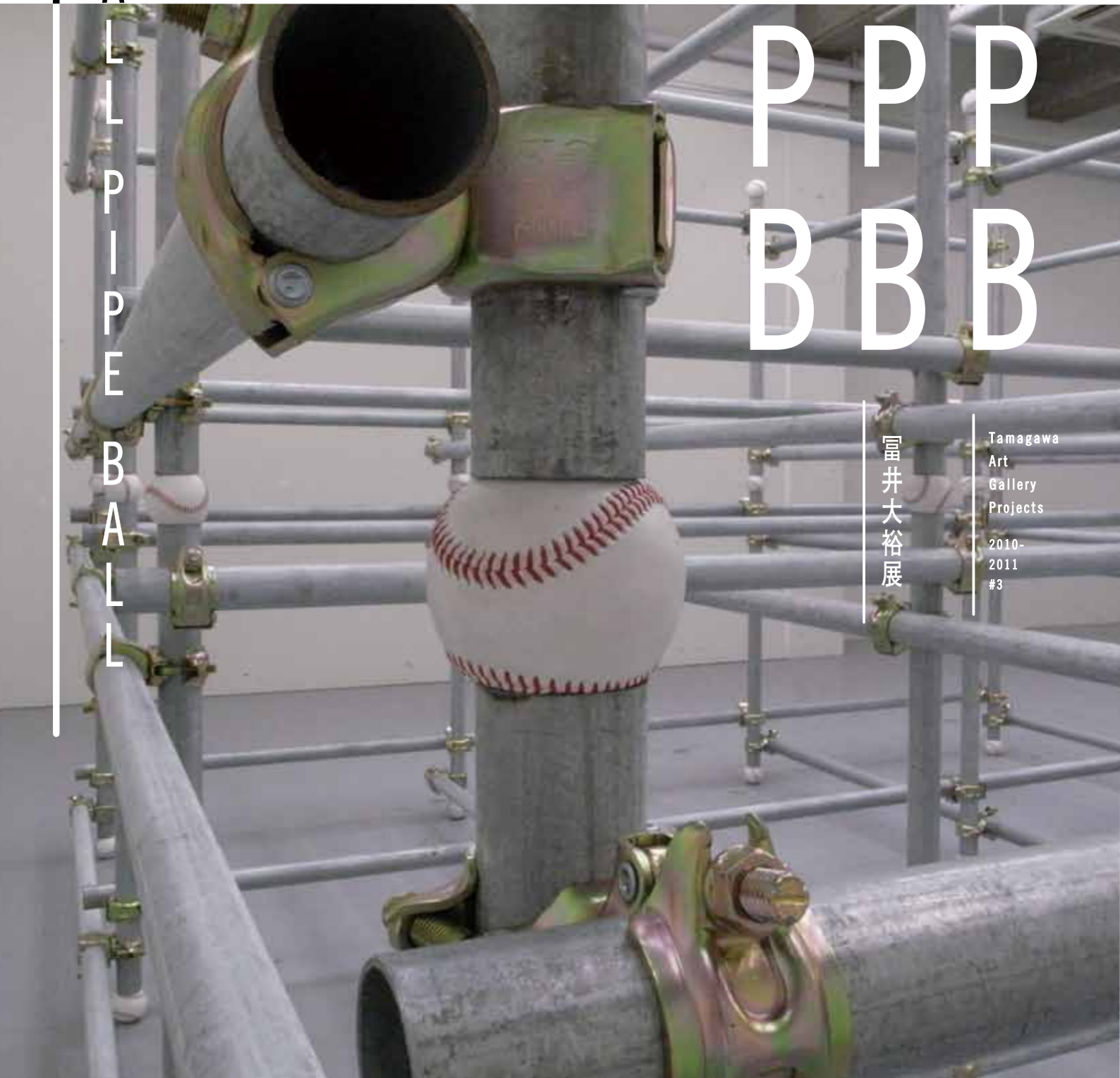
P P P

B B B

富井大裕展

Tamagawa
Art
Gallery
Projects
2010-
2011
#3

B
A
L
L
P
I
P
E
B
A
L
L



アーティスト・トーク



富井大裕『BPB』

2009年秋、第一回所沢ビエンナーレ『引込線』で公開され話題を呼んだ、気鋭の美術作家富井大裕の大作、“Ball Pipe Ball”。その作品を、作家自身がはじめに構想したオリジナル・バージョンで蘇らせました。

会期 → 2010年6月29日～7月3日 10:00～18:00 会場 → 玉川大学3号館102 アーティスト・トーク → 富井大裕×林卓行 2010年6月29日 17:00～

富井大裕 1973年新潟県生まれ。東京都在住。1999年武蔵野美術大学大学院造形研究科彫刻コース修了。日用品の使用と原理的な作品の両立を試みる希有な作家として知られる。これまでに個展・グループ展多数。2009年にgallery α M『変成態—リアルな現代の物質性』、所沢ビエンナーレ『引込線』、また2011年には東京都現代美術館『MOTアニュアル2011 Nearest Faraway 世界の深さのはかり方』に参加。2008年3月より、茨城県のアークス・スタジオにて、個展『企画展=収蔵展』を作品が朽ちるその日まで開催中。

VOICES

参加者の声

野球ボールの上に、鉄パイプ、そしてまた野球ボールが乗っている。

ひとつひとつは見慣れたもののはずだが、確実に異色な雰囲気をかもしだしていて、「これはなんだろう」と魅入ってしまった。

日用品を使った作品を発表している富井氏はこの作品の構想し続けていたとのこと。何故そのときに実現しなかったのかという問いに対して、「まだ自信がなかった」と富井氏。作家は常に試行錯誤を繰り返し、続けているものなのだと思います。

トーク・イベントで初期作品から見せてもらおうと、あらためて優れたアーティストだということがわかる。学生時代から一貫してシンプルな作品を作っているけれど、すべてが思考を重ねた末にそうになっている。単純なのとシンプルなのはやっぱりちがう。多くの学生に見習ってほしい。



合同講評会 Open Criticism (1)

ビジュアル・アーツ学科教員による 2010年度春学期の合同講評会。

授業課題で制作したものから自主制作作品、イメージ中の次回作エスキースや 過去作品の写真でも、とにかく何でも自由に持ち寄ることができる。ジャンルやメディアの枠を超えてオープンに作品を見せ合い、批評しあうことで、クリエイティブ・スピリッツを刺激し合う場になればと考えた。作品を出品せず見学だけでも参加可能としたことにより、様々な分野の学生と教員を集めた。

会期 → 2010年 6 月 18 日 17:00-18:30 会場 → 玉川大学3号館102

VOICES

参加者の声

「私の作品は・・・コンセプトは・・・」と自分の作品を上手に説明する作家が昨今増えてきているように感じる。

批評は誰かにしてもらうだけでなく、自身でもできるようにならなくてはと思い参加した。参加者が多岐にわたっていて、通常の講評と見方の違う意見を得られたことが良かった。

とにかく面白いものをつくるために、というくくりで開催されていたと感じる。自分は今回見学者として参加した。印象的だったのは、興味のある作家さんの作品制作のプロセスを、自身でもやってみたという実験的な作品である。

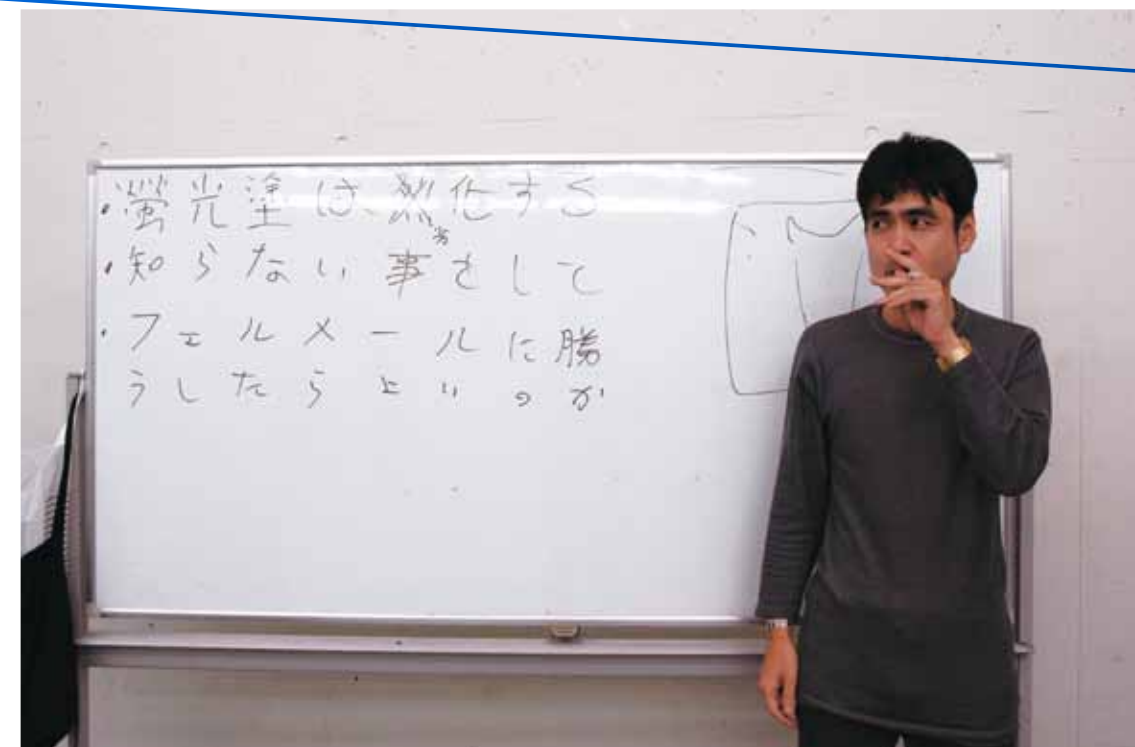
身近にある素材やできごとを作品化しよう、という試みが多かった。安易と言えば安易だけど、でもそれは発想力を鍛えることにつながるし、いつか高等な技術や高級な素材が使えるようになったときに、活かしてくる。



O
P
E
N

C
R
I
T
I
C
I
S
M

いきづまったら、部屋の物を七割捨てる



ネオ漫画家 横山裕一＝時間を描く



蛍光塗料は劣化する
知らないことをしてみたい
フェルメールに勝つには
われわれはどうしたらよいのか

Tamagawa
Art
Gallery
Projects
2010-
2011
#5

横山裕一
ペーパー・ムーム
2009

アーティスト・トーク



横山裕一 『蛍光塗料は劣化する__知らないことをしてみたい__ フェルメールに勝つにはわれわれはどうしたらよいのか』

『六本木クロッシング2007』や川崎市民ミュージアムでの個展『わたしは時間を描いている』などでの活躍も記憶に新しい、今見逃せないアーティストの一人、横山裕一氏をお迎えしたトーク・イベント。

横山氏は武蔵野美術大学で油絵を学び、その後漫画家に転向。一度見たら忘れられない個性溢れる登場人物による、先の読めない展開、そして「時間」を描きこんだ大胆かつ新時代的な表現によって、まさに唯一無二の作品——ネオ漫画——を生み出している。

すべてのプロジェクトのうちでもっとも多数の観客を集めた今回のトークでは、作品、制作の裏話はもちろん漫画家／アーティストとしての意識の差異、あるいは海外での芸術祭で体験した面白いハプニングのことなど、充実した内容のお話を聴くことができた。さらに会場では、横山氏独特の切り口によって来場者のアートについての疑問や人生の悩みまで、疑問・難問を一刀両断していただいた。

会期 → 2010年10月27日 17:00-19:00 会場 → 玉川大学3号館102

横山裕一 1967年宮崎県に生まれ、武蔵野美術大学で油絵を学んだ後、表現手段の一つとして漫画を描き始める。横山自身が「ネオ漫画」と評する『NIWA』『トラベル』『ニュー土木』等の作品は、国内外で高い評価を得ている。2010年4月には、初の大規模個展となる『横山裕一ネオ漫画の全記録：わたしは時間を描いている』（川崎市市民ミュージアム）が開催。また近年では『六本木クロッシング2007』（2007年、森美術館）、『City_net Asia』（ソウル市立美術館）など数多くのグループ展に参加。

VOICES

参加者の声

今回は主に学生を対象としたイベントだったため、横山氏の学生時代の作品から、ネオ漫画家に至る経緯、そして現在までの活動を振り返ってもらった。横山氏の独特な発想と語り口、柔軟さに惹き込まれた。

「幼い頃ゲームなどのおもちゃを買ってもらえず、河原などに落ちている顔のように見える石などを拾って遊んだ」、という話が横山さんの今の作風にも生きているように感じ、思わず自分の幼少期の遊びや考え方を振り返った。

漫画は知っていたが、立体作品を作っていた事は知らなかった。絵画、立体、漫画とどれを見ても、横山氏の色が出ているのがよくわかった。最新の電子書籍での出版も考えている、ということから今後も色々な形で作品が見られるような気がした。海外で作品に出会うことも増えるのだろうか。

SOUND | VISION



Tamagawa
Art
Gallery
Projects

2010-
2011
#6

SOUND | VISION =

《聞こえるかたち》と《見える音》

空間に対する異なる

アプローチ



金子智太郎氏によるレクチャー



演奏風景（“Clapping Music”）



自作解説（“EaR”）

SOUND | VISION

《音》に焦点をあてながら、「聞こえるもの＝sound」と「見えるもの＝vision」がそれぞれの枠を超え、ひとつの展示空間を創造・共有するアート・イベント。そのモデルは1969年にニューヨークのホイットニー美術館で開かれた、“Anti Illusion: Procedures/Materials”にある。リチャード・セラ、ブルース・ナウマンといった美術家たちに加え、スティーヴ・ライヒやフィリップ・グラスら音楽家たちも参加したその伝説的な展覧会は、題名からうかがえるように、作品の「素材materials」とともに「手順procedures」に着目したものだっ。

今回のイベントでは、この展覧会にライヒが出品した『振り子の音楽 Pendulum Music』を、芸術学部生が再制作＝再演。このプログラムを中心に、同じく芸術学部生による同時期のライヒ作品の演奏や学生による新曲の発表、さらにゲストを招いてのレクチュアの実施によって、ジャンルを問わずさまざまな作品制作に「プロセス＝過程」の果たす役割について、再検討を加えた。なおとくにこのプロジェクトでは授業との積極的な連携が試みられ、作品の再制作のほか、会場で配布されたライヒによる自作解説資料の原文（英語）の読解や翻訳なども学生が行った。

【演奏曲目】

スティーヴ・ライヒ Steve Reich、『振り子の音楽 Pendulum Music』（1968年） 日時 → 2010年11月29日（月）13:00ー

再制作／演奏：2010年度「芸術演習B」（担当：林卓行）受講学生

スティーヴ・ライヒ Steve Reich、『手拍子の音楽 Clapping Music』（1972年） 日時 → 2010年11月29日（月）、11月30日（火）、12月1日（水） 各日17:15開演
演奏 → 阿美千尋・栗原千亜紀（ともにビジュアル・アーツ学科2年）

中村明日香（メディア・アーツ学科3年）、“EaR”（コンピュータ音楽作品、2010年） 日時 → 2010年11月29日13:30ー

【関連レクチャー】

『日常に鳴り続ける音楽：生成音楽ガイド』 講演：金子智太郎氏（東京芸術大学教育研究助手[美学]、本学メディア・アーツ学科非常勤講師）

日時 → 2010年11月29日（月）、17:30ー19:00

協力 ジョナサン・リー（メディア・アーツ学科助教）

展示会期 → 2010年11月29日（月）ー12月3日（土） 11:00ー18:00（会期中無休／初日のみ13:00から） 場所 → 玉川大学 大学3号館102

金子智太郎 美学・聴覚文化論。東京芸術大学美術研究科博士後期課程終了。博士（美術）。ロンドン大学ゴールドスミス校聴覚文化専攻修士課程終了。現在、東京芸術大学美学研究室助手。共著に、『iPhone×Music：Phoneが予言する「いつか音楽と呼ばれるもの」』（2009）。主なプロジェクトに『アンビエント・リサーチ』（2010-）

VOICES

参加者の声

ライヒによる説明書を読み、自分たちで実際に演奏してみた。ハウリングの調整が必要なことなど、想像していたよりとても繊細な作品だった。ライヒは作曲にさいしてどのくらい実験を重ねたのだろうか。彼の音への感覚にとっても興味がわいた。

金子智太郎氏の講演では、「生成音楽とは何か」がテーマ。雀がギターを鳴らす、風がパイプを通り音を奏でる、といった参考作品を通して「音」は聞こえるだけでなく、見たり触ったりできるものなのだと思います。

面白かったが、難しかった。ふたりでのセッションということもあるが、単純だからこそアクセントに強弱をつけるのもきわどいところだった。 （“Clapping Music” 演奏 栗原千亜紀）

現代アート×児童館＝ アート・マネジメントの最先端

公開トーク・イベント

クリエイティブ・アート・マネジメント 思いもよらない出会いをつくる

2008年から始まった「アーティスト・イン・児童館」のプログラム・ディレクターである臼井隆志氏を迎えたイベント。東京アートポート計画の一環としても行われている「アーティスト・イン・児童館」とは、子供たちの遊び場である地域の児童館でアーティストを招聘し、子供たちの遊びの活動とアーティストの創作・表現の活動とをゆるやかに連結させることを意図したプログラムである。既存のアートの制度や仕組みを揺るがすクリティカルな実践を続ける臼井氏から、新しいアート・マネジメントのあり方についてお話をオープン・ミーティング形式でお聞きした。

会期 → 2011年1月13日17:00-19:00 会場 → 玉川大学3号館102

思いもよらない出会いをつくる
クリエイティブ・アート・マネジメント

VOICES

参加者の声

「思いもよらない出会い」が何かと思って参加してみた。子供達の遊び場にアーティストがやってくる、アーティストは作品を作り始め、子供達はなんだろうと感じる。好奇心のまま近づき、遠くから様子を伺う子。既存の美術教育の枠にはまらない体験なのだろうと思う。

ディレクターの臼井さんは、子供時代、転校などで学校があまり楽しくなく、学校ではない場所との関わりが大きかったという経験の話は非常にわかりやすかった。実体験に基づく考え方はすごくリアルだ。



臼井隆志 1987年東京都生まれ。東京都在住。アーティスト・イン・児童館プログラム・ディレクター。2009年慶應義塾大学総合政策学部卒。アーティスト・イン・レジデンスの制度やワークショップの技法を引用したアートプログラムを実施している。2008年より練馬区立東大泉児童館にて「アーティスト・イン・児童館」を開始。本プログラム・ディレクターとして、「ことばのかたち工房」（アーティスト：西尾美也 2008年10月）、「児童館の新住民史」（アーティスト：北澤潤 2009年11月-2010年3月）の企画・運営を手がける。2010年より練馬区立中村児童館にて、アーティスト・ユニット「Nadegata Instant Party」（中崎透+山城大督+野田智子）を招待した制作プロジェクトを展開中。その他、実験的な創作活動をアーティストや活動家とのコラボレーションを通じて実践している。 <http://jidokan.net/>



合同講評会 Open Criticism (2)

芸術学部ビジュアル・アーツ学科教員による、2010年度秋学期合同講評会を開催。

アニメーションやパフォーマンスなど、とくに一年生が実験的な作品を出してくる傾向が見られた。

会期 → 6月18日 17:00 - 18:30 会場 → 玉川大学3号館102

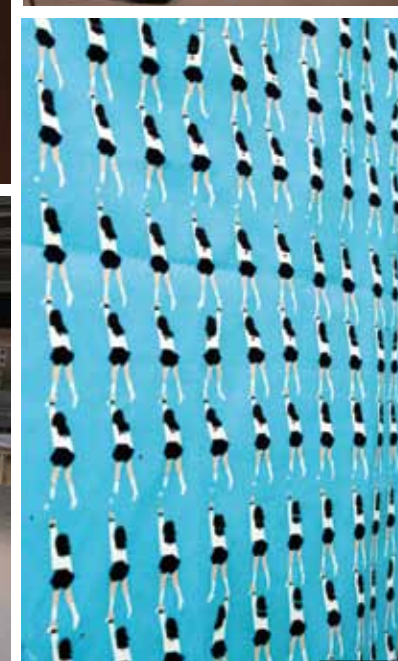
VOICES

参加者の声

展示の仕方、見せ方に対する鋭い講評が多くみられた。スクリーンに大きく映すのか、ブックにまとめるのか、など。作品は見せ方までが作品！ということ。

自分自身を作品の一部にする、作家がいないと作品としてなりたない、という意見が出た「かぶり物」の作品。自分や友人もかぶってみて、たしかに、と思った。同時に、かぶる人で作風が変わる作品も面白いのではないかと考えた。

残念なのは参加者がすくないこと。教員だけでなくほかの学生からも率直な意見が聞けるいい機会なのに、もったいないよね。批判を恐れるところからは、けっきょくにも生まれないと思うんだけど。べつに批判ばかりしているわけでもないんだし。



OPEN
CRITICISM

謝辞

これらTAG=Tamagawa Art Gallery のすべてのプロジェクトは、学外からの多彩なゲストとともに、多くの学生諸君の協力なしでは成り立たないものでした。そのすべての名前を挙げることはできませんが、とくに以下の学生たちは、ときに広報資料のデザイン、ときにトーク・イベントの司会、そしてときにはプロジェクトそのものの立案など、それぞれにユニークな力を提供してくれました。ありがとう。感謝の意を込めてここにその名前を記します。

阿美千尋

飯塚茜

伊藤純恵

内田知奈

金子記子

工藤万理華

栗原千亜紀

小西美咲

佐藤琴音

芝村昌志

介川貴晶

高島功

内藤青也

中村明日香

野本直輝

深川茉利安

山中悠

吉田聡

(敬称略／卒業生を含みます)

2011年3月

TAG Projects 2009-2011

Tamagawa Art Gallery Projects 2009-2010 2010-2011

【協力／助成】

平成22年度玉川大学芸術学部共同研究：

『大学内オルタナティヴ・スペースの運用による、芸術教育の実践とその効果の測定』

研究代表者：林卓行（ビジュアル・アーツ学科准教授）

研究分担者：藤枝由美子（ビジュアル・アーツ学科助教）

同：東方悠平（ビジュアル・アーツ学科助手）

【特別協力】

玉川大学芸術学部ビジュアル・アーツ学科

活動報告書 Activity Reports

デザイン 高島功（メディア・アーツ学科2010年度卒業）

編集 金子記子（ビジュアル・アーツ学科3年）、林卓行

発行 2011年3月31日

印刷 玉川学園DTP制作課

R A
E C
P T
O I
R V
T I
S T
Y

Tamagawa
Art
Gallery
Projects

2009-2010

2010-2011